九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

京城だより① 佐藤春夫全集未収録資料

嚴，基權
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/19886

出版情報：九大日文. 16, pp.16-37, 2010-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

京城だより①

佐藤春夫全集未収録資料

嚴基權（EOM Ki-kwon）

「京城日報」は明治三十九年に当時の初代統監である伊藤博文によって朝鮮で創刊された日本語新聞である。熊本の国権党が中心となって明治二十八年に安達謙蔵により朝鮮で創刊された「漢城新報」と明治三十七年四月に菊池謙譲により創刊された「大東新報」を統合したものである。「京城日報」は最初、日本語とハングルで発行されたが、創刊から約一年後の明治四十年九月二十一日にはハングル版の発行が中止となり、日本語版だけが刊行されるようになる[1]。

創刊から日本の敗戦による昭和二十年までのほぼ四十年間、「京城日報」は親日的な論調で朝鮮の植民地化を肯定するなど朝鮮総督府の機関紙としての役割を果たしたと言われている。そのため、「京城日報」は朝鮮総督府の御用紙というレッテルが張られ、これまで日本・韓国双方の文学とメディア研究においてあまり注目されなかった。「京城日報」に関する研究は少なく、本格的な研究書としては、近年出版された鄭晋錫（チョンシンソク）『言論朝鮮総督府』（コミュニケーションブックス、平成十七年五月六日、ソウル）や李相哲『朝鮮における日本人経営新聞の歴史』（角川学芸出版、平成二十一年二月二十八日）を見るのみである[2]。「京城日報」の復刻版[3]が近年出版され、植民地時代の政治、社会、文化などの総合紙であった「京城日報」に対する研究基盤が整ってきた。

本研究はその中でも文学に注目し、日本語文学が「京城日報」というメディアを通して植民地の朝鮮でどのように展開されてきたのかを明らかにしたい。その基礎作業としてこれまで復刻版『京城日報』（以下『京城日報』と略す）の一巻から一九一巻までに掲載された文芸作品、並びに文芸関連記事をデータベース化してきた。その上で「京城日報」に連載されていた作品の転載の問題や文芸欄の変遷について考える。これによって戦後日本の文学史から忘却されていた明治後期から大正・昭和にかけての「外地」の作品群を復元し、新たな日本（語）文学史の補足または見直しが期待される。

本稿ではまずその一端として「京城日報」における佐藤春夫関連資料を紹介する。「京城日報」には佐藤の作品が四編掲載されている。そのうち、詩「十三時」[4]（昭和二年二月二十五日）は全集に収録されているが、それ以外の評論、短篇小説や翻訳小説はすべて全集未収録である。主に『定本佐藤春夫全集　全三十八巻』（臨川書店、平成十年四月～平成十三年九月）を参考にした。その他半田美永著『佐藤春夫研究』（平成十四年九月二十五日、双文社出版）と浦西和彦編『未刊行著作集6　佐藤春夫』（平成六年五月二十日、白地社）なども参照したが、何れも「京城日報」に関する書誌情報はない。「京城日報」に掲載された順番から概観すると、「悲劇とは何」[5]（昭和二年五月十七日）という短い評論

と、油絵で二科美術展で入選したことのある佐藤春夫が、昭和五年九月三日から翌月の十月四日まで、東京府美術館で開催された第十八回二科美術展を観覧した時の感想を綴った「二科一まわり」（昭和六年十月一日～四日、三回連載）が掲載されている。このような佐藤春夫の美術に対する関心は数カ月後、オー・ヘンリー原作の翻訳小説「最後の一葉」（昭和七年一月十三日～二十日、四回連載）が同紙に掲載されたことからも垣間見ることが出来る。最後にタイトルに「創作」と付された「律儀者」[6]（昭和十三年一月七日～十一日、三回連載）は、戦争に召集されたことを夫に知らせるために上京した妻子と、偶然出会った主人公とのエピソードが描かれている。

以上のような全集未収録資料以外に付録として「京城日報」における佐藤春夫関連記事も載せておく。谷崎潤一郎とその妻チヨとの所謂「細君譲渡事件」を報じた記事と、昭和十三年五月に保田與重郎と朝鮮を訪問した時の講演会の様子が記された記事である。今後も「京城日報」に掲載されている作品について論じつつ、全集などに収録されていない作品や評論などの新資料の紹介を進めていきたい。なお、今年末に発行予定の「叙説」Ⅲ06号（花書院）には「京城日報連載小説・講談目録」（仮）を掲載する予定である。

【注記】

1　ハングル版と日本語版の「京城日報」と共に、英語版もあった。「京城日報」が創刊された明治三十九年十二月五日に当時の統監府の御用紙として再編発行された「The Seoul Press」がそれである。明治三十八年六月三日に創刊された「The Seoul Press Weekly」を統監府が買収したものである。「The Seoul Press」初代社長は伊藤博文の広報秘書であった頭本元貞で昭和十二年五月まで続いた。

2　「京城日報」に関する研究書以外に、論文としては柴崎力「徳富蘇峰と京城日報」（『日本歴史』第四二六号、吉川弘文館、昭和五十八年十月一日）、李錬「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」（「メディア史研究」第二一号、ゆまに書房、平成十八年十二月十五日）などがある。特に、李錬は「『京城日報』は総督府時代には朝鮮における中央紙であると同時に成立から総督府の広報紙の役割を果たし」たと述べながら、「『京城日報』の社長と経営方針についての研究は総督政治或いは植民地言論統制研究には不可欠なものだと」主張している。

3　「京城日報」の復刻版は次のように五回に渡って刊行されている。第一次刊行（一巻～二十巻／収録期間は大正四年九月二日～大正七年十二月十三日、韓国統計書籍センター、平成十五年十一月十五日）、第二次刊行（二十一巻～五十五巻／大正八年一月一日～大正十三年十二月三十一日、韓国図書センター、平成十七年三月一日）、第三次刊行（五十六巻～一一五巻／大正十四年一月一日～昭和九年十二月三十一日、韓国図書センター、平成十七年九月三十日）、第四次刊行（一一六巻～一六三巻／昭和十年一月一日～昭和十四年十二月三十一日、韓国図書センター、平成十八年十月三十日）、第五次刊行（一六四巻～一九一巻／昭和十五年一月一日～昭和二十年十二月十一日、韓国図書センター、平成十九年八月三十日）。本文異同は句読点以外には特にない。

4　初出は「報知新聞」（大正十五年一月一日）。

5 「定本佐藤春夫全集　第三四巻」を見ると「悲劇は何」という評論が「京城日報」に掲載されるほぼ一カ月前の昭和二年四月二十六日の「大阪朝日新聞」に、「悲劇」という似たようなタイトルの評論が見受けられるが内容は異なっている。

6 「律儀者」という題名は連載二回目以後は「律義者」に変わる。本稿では初回の題名に拠った。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年）

凡例

一、佐藤春夫の全集未収録資料の翻刻に当たり、漢字は原則として原文のとおり旧漢字で、仮名遣いも歴史的仮名遣いで表記した。なお、判読不可能な文字は「■」で記した。

一、ルビも原文のままに付した。但し、活字がつぶれ、判読混乱な場合は常識的な読みに従った。また、改行や句読点も原文どおりに表記した。

一、小説の登場人物名については、表記が統一されていない場合があるが、原文に従った。例えば、「律儀者」の主人公の名前は「牛嶋」と「牛島」が混在しているが、原文のままに記した。

一、各資料の最後に掲載された日付、朝夕刊の別、掲載面数を付した。

一、〔〕は編者・嚴による注記である。

悲劇とは何

悲劇とは何か、世の中に果して悲劇といふものがあるか、又世の中に悲劇でないものがあるか。

妻が嫉妬深いことから悲劇が起こつたとする、しかしそれは教養のない女である病氣であつて、教養のある女には起こらないことであるから悲劇でなく滑稽である、若こゝに一人の人がゐてすべてのものをよくしやうと努力したが遂に出來ないですべてを不幸にしたといふ場合は眞の悲劇である。

然しかゝる悲劇は容易に見當たらない、多くの悲劇は當然の處に源を發してゐる、例へばある男が若い時代になまけたゝめ、文字を知らないでそのため悲劇が起こつたとしてもそれは第三者からみれば喜劇にしかすぎない、又恐れるにたらないものを恐れてゐる人も悲劇の人でなく、喜劇中の人である、萬人のものがのがれることの出來ない錯誤の上にたつた時だけ悲劇は起こるものであると思ふ。

然らば悲劇はどうして救ふかといへば、悲劇は救はれない、人間は神の創造の途中にあるものであるから不完全なものである、缺點が多い處に悲劇も起こるのである悲劇と考へられることは免るゝことは出來ない、そして悲劇の中には緊張がある、喜びや幸福は人をのろまにさせ欠伸を催させるが悲劇は人に生甲斐を感ぜしめるワイルドが牢から出て來た時、或る友人に「世の中で生きる値打のあるものは悲劇だけだ」といつたそうである。

人に長じてゐるとか、劣つて居るとかの人は悲劇が多い、みにくいのも悲劇であり美しいのも悲劇である、美しい女などは道をあるくにもいつも緊張してゐなければならない、それは人間のほんとうの幸福ではないかも知れない、喜びは人の心を外へ向けさせるが悲劇は内を見つめさせる、そしてそこに生甲斐を發見することが出來る、悲劇のため人間が負かされ押しつぶされるならばこれは喜劇に終るのである。

世の中には、よく「自分より不幸なものはない」といつて世の中のかなしみを一人で負つたやうな考へ方をしてゐるものがある。これは滑稽であると共に僭越なことである。かなしみは人間共通のものである。そのかなしみさへ、見方によつては喜劇である場合が多い。その喜劇的悲劇に堪へ得ない人は滑稽ではなからうか。〔「京城日報」昭和二年五月十七日朝刊六面〕

二科一まわり

一

秋風都門に至りて漸く美術の花開く小生にとつては最も親み深き二科を見物し、その概況をお知らせ申し上候。遠隔の地に御在住の貴下には多分會場において作品を目のあたりに御覽なさる御機會なかるべきかと存じ、然らば一々の作品に就てこちたき批評など申述べ候事は小生にとつても六ケ敷きのみならず、貴下に於かれても御無用かと存じ候まゝほんの一まわりして思ひつき候まゝを申述べて美術の新潮流や新作家などに對するほんの常識的な一班を御報道申上ぐることゝ致し候。

目錄によれば同會本年度の搬入總數は繪畫四、一二四點、塑彫一二二點、これを作家の人數として繪畫一、一八五人、彫塑六八人の出、そのうち入選四一三點、この作家二七六人、彫塑四二點、作者三三人の割合に御座候。相當の■畫故、あまり低級の作品を■見することなきは勿論に御座候得共、さりとて非常に傑出したものにぶつからず、これを武者小路實篤氏の言葉を借れば「碁でいへば初段に二三目程度とおぼしき作品」が大多數なりと存候。卽ち今一息と思はれる作品と作家多しとの意にて小生も同感に御座候。素人としては皆相當高級なるもさて眞の作家と稱するに足らざるに御座候。眞の作家は■々曉の星の如し、第三室には小出楢重氏の遺作約四十點を連ねをり候が、會場を一巡してこの室に至り候はゞ故人が眞に傑出せる作家なりしことを今更に痛感し、この人すでに亡きを日本畫壇のために長大息せざるを得ず候かく一室に集めて年代的にこの人の製作を見ればその進歩の顯著なること瞭然にて、天この人に齡を借さばの感最も深き儀に御座候一九二五年頃以降の作品よりその特質を發揮し來りをり候。嚴密なる寫生のうちにこの作家特有のハイカラなる新日本的とも申すべき趣味の滲み出し居ることガラス繪なるものを發見しその製作を遺されたるもこの人の好みの大體を雄辯に語

るものなり。その作風簡素にして濃密色彩は豐麗にして洒落なりと申すべくと存じ候。ガラス繪小品裸女Bの如き眞に愛弄すべきもの賣約の札の貼られをり候もむべたりと存じ申し候。毛糸の束の靜物、横たはれる裸女Bの肉體感の豐富なる等すべて作者の實感を把握するに長じたるの證左たるべく、ガラス繪中の傑作フランス人形は趣味的洗練を窺ふによろしく、抜目なき大作品秋蘭立像は彼が大手腕を知るべしステインドグラス圖案二面のみは特別のものながら彼としては不出來と見え申し候。小出君及び安井曾太郎氏の諸作の如きに對する時には貴下が地方に在住せられてこれを鑑賞さるゝの儀なきを貴下のために悲み申候。安井氏は大作家に御座候、大作の風景、また裸女立像、薔薇の靜物等皆弄賞に堪えたるもの、手堅き手法仔々たる研究的態度敬すべし。熊谷守一氏の肖像二點小品ながらまたこれを輕視すべからず候。就中、女の顔の如き一種人に迫る力強き美觀は場中第一のものなりと小生には存ぜられ候。尤も多少難解のもの故、十人が十人心服致し候や否やは保し難きも、鑑識高き人ほど深く愛好することだけは疑ひあるべからずと信じ候。石井柏亭氏の諸作は熊谷氏とは全然反對に何人にも推服さるゝ代り具眼者中面白からずと申す人もある畫風ながら、本年度のものは色彩美しき海の日の出の景、また澁い味の道具の並べる靜物などそれ〴〵に出來榮よろしく小生は綠衣美女像よりもむしろ前二者などを指し申し候。新進年少の會員中にては曾宮一念氏甚だ振ふ。その靜物など甚だ注目すべく向日葵けし等も强烈美觀絢爛に御座候。鍋井君も甚だ勉强致しをられ候も、奈良の月夜の外は例によりて今一息に有之候も少しすつきりと出來候事望ましきなり。〔「京城日報」昭和六年十月一日朝刊六面〕

二

今年度の呼びものたるココシカの出品數點はいづれも面白きものにてへんに神經的な强さともいふべきものを示して一團鬼氣を帶びたる妖氣ある美は珍重すべきものシュテナーの三點はココシカの亞流とも見るべくココシカを皆通俗化したるの觀あり。その他外人會員中にはジエレニエフスキーの遺作。外にビシエルーは年來の期待に反して大成すべき素質ある作家が現時多少沈滯せるに非ざるかを思はしむ。これに反してロオトは今年は活氣ありてこれ亦豫想外のことなり、アスランは振はす。第九室は超現實主義的作品を一まとめにしたる部屋なるが人目を駭かするに足るも、實に悅服せしめ得る作に乏しきを憾み申し候。感傷の生理についてなど大作ながら小生は惡趣味コケオドシの作品として感服致さず、東鄕青兒の諸作品にては寧ろ小品のアリ女の可憐なるを第一に推し候。海濱超現實派の散歩は余り面白からざるもまだしも後者の方通俗ながら一般人士にはうなづかれる節あるべし才人の才氣ある作風中にはとかくあてこみの氣味ありて爲めに品位の乏しく誠實味に缺けたるを惜み申し候。小生はこの部屋にてはむしろ鷹山宇一氏の木版畫「風景を配せる靜物」などをよしと存じ候が、多分山氣ある諸大作に對する反感が多少その原

因なるやも知るべからず候。

正宗得三郎氏の諸作可ならざるは非ざるも多少マンネリズムに陥れりの観なきに非ず、これに比べれば山下新太郎氏の諸作は同じく例によつて例の如き作ではありながら魅力に富めるは甚だ多とすべきを覺え申し候

大きさと作意とによつて評判となれる津田氏の「新議會」の如きはイデオロギー的制作としてもあまりにイデオロギー解説に過ぎざるべく畫業としては小家の寫生的迫眞力なども未だしと申すべく、たゞ俗目を見聞かしめるだけのものかと愚考仕り候。これに似たるものとして同様に評判高きものは有島氏の「大震記念」の大作なるが、この方は新議會よりも力作にして苦心の跡はうなづかれ、部分的に見てもこまかしのところは少なきやうにおぼえ候も、現代日本人の制作としては新らしき方法においての一試作を提供したるものとしてといふの外は、絶對的の傑作としてはこれに敬禮するわけには參り兼ね候。ともあれ力めたりといはざるべからず

彫塑室においては小生はザツキン作のセイロンの黒い木を用ひたる男の首をよしと存じ申し候。一わたり見物するに少くとも二時間を要し甚だくたびれ申候。以上は歸宅後思ひ出し候諸作に對してほんの心覺え程度の記錄にて批評などと申し候ものにては無之、しかも案外に長くなり御退屈を催さしめしにあらざるかを■へ申し候も最後にもう一言を附言致して散漫なる通信のしめくゝりとも致したくと存じ候〔「京城日報」昭和六年十月三日朝刊十面〕

三

開催以來本年度にて十八回、畫壇の常識もその間には進歩致し、帝展あたりにも大分新しき傾向の空氣を移入し得たるはこの二科會の事業の一端として慶賀すべき儀にて、超現實主義一派の先端的なる諸作以外のものならば、この會の作品の大多數のものも帝展あたりへ搬入しても理解される程度にまで進歩したるやに覺え申し候。今に到つてはこの會のさして必要にあらざるやの感も有之候が、これやがてこの會の必要なりし所以にして、この會の成功を祝賀すべく、又今より十數年の後には超現實主義的作品なども一般畫壇常識のなかに適當なる位置を占めてその使命を果すべく、然らば今日今更必要なきが如き観ある二科會の存在は今日の爲めに必要なるにあらずして將來のために必要あるなりと稱べ得べしと存じ候。且當時の創立者たりし先進の諸氏今すでに壯年に非ずといへども畫■未だ容易に老いず、唯に當年の意氣を失はざるのみならず、石井、山下諸氏の如き益々圓熟の妙を加へ、安井、有島諸氏の如きは更に新境地の開拓に餘念なく、新進諸家の本會に對する期待年と共に加はりて溌溂たる　を抱ける　士皆こゝに來り蝟集するの観あり、また海外の諸名流も本會の存在を重視して、遙にその作品をこゝに寄せて本會の仲介によりて、異境の藝苑の異花に接し得るを悦樂とするものひとり少數の我等のみに非ざるべきを思へば、本會の年々の隆盛を■に期待すべき理由の多々あるを信ず

「日本における洋畫の大展覽會として、二科會の列品は多岐

にわたつて居るといへる。小味も大味もあり、印象主義もフオーブも新た〔正しくは、古〕典主義も抽象主義もあれば、ま古〔正しくは、た〕描法には細密も省略もあるし、■様には沈静も激越もある。アカデミズムも斥けるといふ最初の精神は今でも忘れられてゐないが、その多種多様に亘つてゐることを以て定見のやうに評するものがあるならば、それは誤りである。小規模の同人展を別として斯かる大展覽會がその包容する處の廣くなるのは當然である」云々

右は本會の首領とも稱すべき石井柏亭氏が雜誌「セルパン」のために執筆せる二科概觀中の一節であるが、以て本會の抱負の一端を知るべくこの抱負は本年のみならず毎年これを事實において示してゐる

前述石井氏のセルパン所載の一文は二科の見物案内として甚だ要を得たものであるから拙文の評の蕪雜を足らずとする志ある諸君は一見して益を得られることをおすゝめして擱筆致し候。不備〔「京城日報」昭和六年十月四日朝刊六面〕

最後の一葉

一

紐育はワシントン區の西に當る唯有る小區域で、町々の調子が亂れ、俗に路次と云ふ横道に細かく幾つにも分れてゐる。そのまた横道が珍しく曲折迂余して、ある町の如きは、一度ならず二度も、自分で自分を横ぎつてゐる有様だ。この町に結構至極な取柄のあることを嘗てある畫家が發見した。繪の具や紙やカンバスの「つけ」をもつてこの町内へやつて來ると、道に迷つて、勘定は一文も受取れずに、またもとのところへひよつくり舞ひ戻つて自分自身に心付く集金人を想像して御覽なさい。

斯様な譯合ひで、畫かきさんたちは、この古ぼけたグリニツチ。ビレツチ（町名）へと、北窓と、十八世紀式の破風と、オランダ風の屋根裏部屋と、安い屋賃とを目當に、いくばくもなくさすらひ來たつたのであつた。それからといふものは次々に第六街から移轉して幾つかの白鑞製の水呑と、一つ二つコンロを此處へ持ち込んだのが、やがて畫家部落となつたやうな次第である。

ずんぐりとして煉瓦の三階建の天邊に、スウーとジョンスイは自分たちの畫室をもつてゐた。ジョンスイといふのはジョアンナの俗にくだけた通名であつた。一人はメーン生れの者、他の一人はカリホルニヤ生れであつた。第八街のデルモニコで、食事のときに落合つて、藝術と、チサのサラドと、僧正好みの廣袖とに共通の趣味を認め合つたのが縁となつて、茲に彼女等の共通畫室が發祥したのであつた。

それは五月のことであつた。十一月になると醫者仲間で肺炎老人と呼んでゐる冷めたい顔をした見知らぬ他國者が、畫家部落へ忍びよつて此處でも、其處でも、氷のやうな指で人の體にさはつて行つた。イーストサイドへ渡つて來る時分には、猛々しくも大手をふつてあるき、このあはれ者は、到る處に數知

れぬ犠牲者を打ちのめした。やがて彼は、苔のむした狹隘な、路次の迷路を踏み分けて、しづ〳〵と足を進めてゐた。

肺炎氏は、決して、諸君の所謂義俠な老紳士ではなかつた。カリホル二ヤの西風にさらされて、血の氣の薄れた見るからに小柄な婦人が、まさかに、あの赤く拳をかためて、息せき切つてゐる年老いた渡り者の屈强な獲物であらう筈はないのに、彼はジヨンスイをさへ無殘にも打ちのめしたのであつた。

彼女がペンキ塗りの鐵製ベツトに横はつて殆んど身動きもせず、オランダ風に作つてある小窓の硝子越しに、煉瓦建の隣家の脇壁をぢつと見つめてゐるのであつた。

或る朝診察がすむと、忙がしげな先生は、くしやくしやした胡摩鹽の眉毛を動かして、入口の廊下へスウーを招きよせて

「處で御病人ですが、御全快の見込みは、さやうさ、十に一つはありませうか」と彼は檢温器の水銀をふり落しながら云つた。

「で、その見込みと申すのが、あの方自身が是非生きてゐたいとお思ひになることです。何しろ當節のやうに、みなさんが擧つて葬儀屋の味方をなさるやうぢや、醫藥の力などはいかさま愚なものに見えますわい。あのご婦人にしたところで、もう死なにやならぬものと勝手にきめてゐらつしやるんですぜ。それはさうと何かあの方がふだん心にかけてゐらつしやるやうなことはありますまいかなあ」「そのうちナポリの灣を描くと云つてましたよ」と、スウーは云つた。

「繪をかくんですつて、バカナそんなことぢやあありません。二度考へて見るやうな値打のあることで、何かあの方が心にもつてゐらつしやることはありませんか。たとへば男の人と云つたやうな」

「男の方ですつて？」とスウーは口琴の音色のやうな鼻にかかつた聲で云つた。「男の方にーー値打がありますのでせうか。そんなものあの方にやあございませんわ」「成程、そいつは弱りましたなあ兎も角も學問の力で、勿論私の頭からしぼり出し得られる限りのことでして、出來るだけのことは殘らずやつて見るつもりではありますが、御病人が葬式の馬車の勘定するやうにおなりぢあ、醫藥の効能は五割方減じてしまひまさ。すかしてなりともあなたが御病人にたとへば外套の袖の、此の冬の新形をたづねさせるやうにしむけて下されば、十に一つぢやありませんぜ、五つに一つ御全快を御受合ひ出來るんですが」〔「京城日報」昭和七年一月十三日朝刊六面〕

二

醫者が歸つて行つたあとで、スウーは畫室へ這入ると、日本製のナプキン紙を泣きぬらしてクチヤクチヤにしてしまつた。それから畫板を片手に、陽氣な舞踊の曲をうそぶきながら氣取つた足取りでジヨンスイの室へやつて來た。

蒲團にくるまつて、漣ほどの身動きもせず窓の方へぢつと顏を向けたまゝ、ジヨンスイは靜かに寢てゐた。眠つてゐるのだと思つてスウーはばつたりと唄をやめてしまつた。

畫板の支度をすると、雑誌のさし繪になる筈のペン畫を彼女は描き始めた。文壇の成功へと、その進路を開拓しようとして、若い作家たちが、書いてゐる雑誌の讀みものに、御同様挿繪を描いて、畫壇の成功へと若い畫家たちは、そのば路を開拓しなければならないのだ。物語の立物たるアイダホウの牛飼ひの肖像に、馬匹展覽會用のはでやかな乗馬スボンと單眼鏡を描き添えてゐると、ひくひ聲が、何遍も繰返されて、彼女の耳に這入つた。急いで彼女は、寢臺のそはへよつて行つた。

ジョンスイの眼は大きくあいてゐた。窓の外を見めて彼女は物の數を勘定して——逆に勘定してゐたのであつた。

「十二」と、彼女はいつた。しばらくして、「十一」今度は、「十」

「九つ」それから殆んど續けざまに、「八つ」「七つ」と云つた

スウーは氣遣はしさうに窓の外を眺めて見た。何か勘定するものがあるのだらうか。窓からは、むざ出しなわびしい小庭と、二十呎ほど先に、煉瓦建の家屋の脇壁のほか目につくものはなかつた。根元のふしくれだつて、枯れ朽ちてゐる年經た蔦の蔓が、煉瓦塀の半ほどに這ひ上つてゐた、冷めたい秋風に吹かれて、おほかに葉は落ちつくしてしまつた白骨のやうな枝々が崩れかゝつた煉瓦に淋しくすがりついてゐた。

「あなた、何を勘定なすつて？」

とスウーは訊ねた。

「六つ」殆んどつぶやくやうにジョンスイは云つた。「もう前よかずつと早く落ちるわよ、五日前までは凡そ百もあつたでせうね。勘定すると頭がいたくなつたわ。でも今はらくよあらまた一つ落ちたわ、もう五つしか殘つちあゐないの」

「何が五つなのよ？あなたのスウデイに教えて頂戴な」

「葉だわよ。蔦の蔓の。おしまいの葉が落ちると私も死んで行くのよ。三日の間私はちやんとそれを知つてゐたんだわ。先生もあなたにさうおつしやらなくつて？」

「あら、そんな馬鹿なこと、私、知らなくつてよ」とスウーは、わざと大げさにつんとしていつた。

「あの古ぼけた蔦の葉があなたの全快なさることと、一體どんな關係があるんでせうか。つねからあなたはあの蔦がお好きでしたわねいやな嬢ちやんだこと、そんなお馬鹿さんにはならないで頂戴よ。まあお聞きなさいな。今朝先生はもうぢきあなたは全快の見込みだとおつしやつたの、私、その通りにいつて見ませうか、先生のおつしやつたことを。——一對十の見込みだとおつしやつたのよ。その見込みなら、ニューヨークで私たちが電車に乗つたり、普請中の建物のそばを通つたりするときと同じやうに、安心なものでせう。だからさ、肉汁を少しおあがんなさいなさうしてスウデイには仕事をさせてね。それを雑誌の主筆さんに賣つて、スウデイの御病氣の赤ちやんには葡萄酒をさうしてこの貪慾な御自分様には豚肉を買ふんでしたわね」「葡萄酒さんか、もういらないわ」と、ジョンスイは窓の外に眼を向けたまゝで云つた「そら、また一つ落ちたわ。いゝえ肉汁なんか私ちつともほしくないの。もう四つしか殘つちあゐないわ。暗くならないうちに、をしまひのが、

落ちるのを私見て置きたいのよ、さうしたら私も死んで行くんだわね。」

「ジョンスイさん、どうぞね、眼をつぶつて窓の外を見ないやうにして頂戴。私が仕事をすますまでよ。私、明日までにはあの繪を渡さなけれあならないのよ、光線が必要でなきあ日よけをむろんすんだけど」

「だから、ほかの御部屋で描かなくつて？」

と、ジョンスイは冷やかに訊ねた〔「京城日報」昭和七年一月十四日朝刊六面〕

三

「いゝえ、私、あなたのそばにゐたいの、それに、あんな馬鹿々々しい蔦の葉なんぞをそんなにいつまであなたに見てゐさせたくはないのよ」、スウーは云つた。

「仕事がすんだら、さう云つて頂戴ね」と、眼をつぶつて、倒れた彫像のやうに白い顔をして靜かに寢てゐるジョンスイは云つた。

「私おしまいの葉が落ちるのが見たいのよ、もう待つのも飽き飽きしたわ。さうして考へるのも飽き飽きしたわ、何にだつてすがりついてゐる氣はしないの。このまゝ私遠くへ遠くへとんで行つちまいたいわ、あの可哀さうなくたぶれきつた葉のやうにね」

「つとめて眠るやうにして頂戴ね。私、ベールマンサンを呼んで來て隱者の老坑夫のモデルになつて貰ふんですから、一分とは留守にしませんわ、私が、戻つて來るまで、動かないやうにね、よくつて」

ベールマンは下の第一階に住む老畫家であれに、あんな馬鹿々々しい蔦の葉なんぞを、そんなにいつまであなたに見てゐさせたくはないのよ」と、スウーは云つた。

「仕事がすんだら、さう云つて頂戴ね」と、眼をつぶつて、倒れた彫像のやうに白い顔をして靜かに寢てゐるジョンスイは云つた。

「私おしまいの葉が葉ちるのが見たいのよ、もう待つのも飽き飽きしたわ。さうして考へるのも飽き飽きしたわ、何にだつてすがりついてゐる氣はしないの。このまゝ私遠くへ遠くへとんで行つちまいたいわ、あの可哀さうな、くたぶれきつた葉のやうにね」

「つとめて眠むるやうにして頂戴ね。私、ベールマンサンを呼んで來て、隱者の老坑夫のモデルになつて貰ふんですから、一分とは留守にしませんわ、私が、戻つて來るまで、動かないやうにね。よくつて」

ベールマンは下の第一階に住む老畫家であ〔傍線部分は前の文章の反復であり、誤記だと思われる。傍線は嚴。〕つた、彼は既に六十の坂を越へてゐた。半ば人間、半ば山羊の姿をした神サチイルのやうな頭からかけて小鬼のやうなモーゼ髯を房々と垂らしてゐた。彼は繪畫の失敗者であつた四十年間、彼は繪筆を握り續けてゐたが、彼を守護する美の女神の裳裾にふれるほどの進境をさへ示さなかつたのだ。常に傑作を描くと云つてゐ

たが、今だにそれをはじめる様子はなかつた。この數年間といふものは、賣り物の爲めや、廣告用の粗畫に折々畫筆を染めたがか、少しも繪らしいものは描かなかつたのだ職業モデルを雇ふ資力のない、同じ部落の畫家たちのため、モデルの役をつとめて些少の金をもうけてゐた。ほうずもなく燒酎を飲んで醉ふと、相變らず末々の傑作を語つてゐた。その他のことを云へば、彼は氣性の荒い、小柄な老人であつた。人の女々しいのを見ると手ひどく嘲罵した。さうして彼は階上の畫室に住んでゐる二人のうら若い閨秀畫家たちを守護する特別な番犬の如くに自分を心得てゐるのであつた。

階下へ降りてみると薄暗い彼の室には相變らずのベールマンが燒酎の臭ひを强く匂はせてゐた。片隅の畫架には二十五年もそのまゝになつて、傑作の最初の一繪が下されるのを今かと待つてゐる眞白なカンバスがのつかつてゐた。彼女はジヨンスイの空想について彼に語つた。此の世の執着がゆるむと、もろくも、木の葉のやうに、ジヨンスイは散つてしまふのではなからうか、それが心配でならぬとスウーは云つた。

あからさまに、涙を一杯眼に溜めてゐたベールマンは口をきはめて、この馬鹿げた空想を嘲笑し且罵倒した。

「何ですつて！糞面白くもない蔓なんかの葉羽が落ちるからと云つて、死ぬ氣になるなんて、そんな馬鹿げた奴が、何處の國にありますか？私あそんなことがないね。いやだ、いやだ、もう私あ隱者の頓馬野郎のモデルなぞに坐るなあご免蒙りたいね一體どうしてそんな愚なことをあの人に考へさせて置くんです？本當にお氣の毒なジヨンスイさんだよ」

「あの方は大變惡いのよ」とスウーは云つた

「熱のせいであの方の精神は變な想像で一杯な、病的なものになつてゐるのよ。成程ね、ベールマンさん。私のモデルになつて下さらないんですつて、もうそれには及びませんわ、だけど私、あなたをいやなおしやべり老爺さんだと思つてよ」

「やつぱりあなたも女だなあ」とベールマンは叫んだ。「誰が坐らないと云ひましたかい。さあ行きませう。三十分も前から、私あモデル臺に坐る支度が出來てると云はう云はうと思つてゐたんですせ畜生！斯んなうら、とても、ジヨスイさんのやうな方が病氣して寢てゐるところぢやありませんぜ。そのうち私あ傑作を描くよ。さうしたら皆でいいところへ越して行かうね。さうだ、さうだ」

彼等が階上へやつて來たとき、ジヨンスイは眼つてゐた。スウーは窓臺のところまで日よけをおろすと、ベルマンを手招きして、一緒にほかの部屋へ這入つて行つたその部屋へ落着くと彼等は、窓の外をのぞいて怖る怖る蔦の蔓を眺めた。しばしの間、彼等は無言のまゝお互を眺めやつてゐた。冷めたい强情な雨は雪まじりに降りしきつてゐた。古ぼけた青シヤツを着たベールマンは、岩のつもりで伏せて置いてあつた鍋の上に、隱者の坑夫となつて腰をおろした〔「京城日報」昭和七年一月十七日朝刊六面〕

四

一時間ほど眠つて、次の朝スウーが眼を覺ますと、ジョンスイは、どんよりとした、大きくあけた眼で、引きよせてあつた綠の日よけを、一心に見つめてゐた。

「あれをあげて頂戴な。私見たいのよ」と彼女は小聲でスウーは彼女の言葉に從つた。が、しかし、意外なことには終夜降りつゞけ、吹き通してゐた豪雨と烈風のあとにも、依然として散り殘つた蔦の葉が一つ、煉瓦塀に際立つて見えてゐた。それは蔓に殘つてゐる最後の一葉であつた。さうして今だに莖のあたりは暗綠色を帶び、鋸の齒のやうな葉の綠は早くも分解と腐敗の黃色に彩られて、二十呎もありさうな枝からけなげにもぶらさがつてゐた。

「あれがおしまいの葉よ」と、ジョンスイは云つた「昨夜のうちにきつと散つてゐると思つたわ。風の音もきこへてゐたのに。今日は落ちるでせう。さうしたら一緒に私も死ぬんですわ」

「あなた、あなた」と、スウーは病人の枕の方へ、つかれ衰へた顏をうつむけて云つた。

「御自分のことが考へたくないんなら、私のことを考へて頂戴よ、本當に私はどうすればいいのよ?」

けれどもジョンスイは何とも答はしなかつた。この世で一番淋しいものと云へば、不思議な遠い死出の旅に出ようとしてゐる人間の魂である、友情とこの土の彼女をしばりつけてゐる世のほだしか、一つ一つゆるんで來るにつれて、更に力强く、死ぬと云ふこの空想が彼女を支配するやうに見えた。

日はたけて行つた。・昏の中でさへ塀に際立つて、淋しい蔦の一つ葉が、莖にすがりついてゐるのが見られた、さうして夜が來るとまた北風が荒れ始めた。一方、雨は小休みなく降りつゞけて窓を打ち、さうしてひくいオランダ風の庇からぽた〳〵と落ちてゐた。

あかるくなると、人の心も知らぬジョンスイはまた日よけをあげてと云つた、

蔦のの葉はまだ散りもやらず、枝にすがりついてゐた。ジョンスイは久しい間それを見つめてゐたそれから、ストーブの火で、鷄の肉汁をかけ交ぜてゐたスウーに話しかけた。

「私本當にいけない娘でしたわね」とジョンスイは云つた。「何かの力があそこへおしまいの葉を殘して置いた。どんなに私がいけない人間か、それを見せしめにしようとしたんだわ。死にたいなんて思ふのは罪惡だわ。ではね、肉汁を少し頂戴な、さうして葡萄酒を入れて牛乳もね、いいえ、それよりか、鏡をもつてきてよ、それから私に枕をよせかけてね。私坐つて、あなたがお料理するのが見たいわ」

その後一時間たつてから彼女は云つた。

「スウーちやん、私、そのうちにナポリの灣を描きたい」

午後、醫者が診察にやつて來た先生が歸らうとすると、スウーは何かをかこつけに入口の廊下へ出て來た。

「まづ五分と五分の見込です」と先生はスウーの痩せた慄える手をとつて云つた「看病が行届けばこつちのものです。これからもう一つ階下の患者を診察しなければなりません。ベー

ルマンとか云ひましたよ。何でも畫家さんだつていふことです。やつぱり肺炎ですわい。何分老人で衰弱してはゐるしおまけに急性でな、助かる見込みはないんです。もそつと看病が行届くやうに、今日入院させる筈です」

翌日、醫者はスウーに云つた「もう大丈夫危険はありませんよ、あなたがお勝ちになつたんだ。これから先は養生と看病だけです」

さうしてその午後、スウーはジヨンスイが眞青な、役にもたゝぬ毛糸の薄い肩掛けを滿足さうに編みながら横はつてゐた寢床のそばへやつて來て、枕くるみにジヨンスイを抱いた。

「私、あなたに御話しすることがあるのよ」と、スウーは云つた。「病院で今日、ベールマンさんは肺炎で倒れたのよ、たつた二日惡かつたばかりなの、惡くなつた最初の日ですわ、階下の部屋にあの方がぶつ倒れてゐたのを、門番が朝見付けたのですつて、靴も着物もぐつしより濡れて、凍つてたさうです。あんな恐ろしい晩に、何處へベールマンさんは出てゐたのか考へもつかないつてことでしたわそれから、ともつたまゝの提灯と、ひつぱり出してあつた梯子を見付けたのよ、ほかに、繪筆が五六本ちらばつてゐて、パレツトには緣と・色が交ぜてあつたさうです、ね、窓から見てご覽なさいなあの塀にすがりついてゐる最後の蔦葉のをよ。風が吹いても、あれがばたともしなかつた譯が分つて？あれはベールマンさんの傑作よおしまいの葉が落ちた晩に、あの方があれをおかきになつたのですわ」（完）〔「京城日報」昭和七年一月二十日朝刊六面〕

律儀者

一

ラツシユ・アワーの滿員電車にひらりと飛び乘ると片隅の吊皮にぶらさがるなり、小脇から取り出した夕刊を、片手で器用に折り疊んでゐたのが必要な部分をとり出して目の前に小さく出してゐたのを、何に感じたか不意にじやけんに丸めてしまつてポケツトのなかへねじこんだ。その動作に幾分激越な有様か〔正しくは、が〕あつたのがその後眞面目に沈鬱な表情で考へ込んでゐる一人の男があつた。彼がひろげてゐたのは殉國忠魂と題した〇〇方面の戰死者名簿ともいふべきものであつたゞけに彼のこの擧動は曰くありげに思はれた。その中からこの男は一體何人の名前を見出したといふのか。兄弟をか、親戚をか、友人をか。否彼はまだ何人の名前をも見るひまもなかつたはずである。たゞその表題をひろげてゐる自分に氣づいたゞけでこんなにふきげんになつてしまつたのである。彼はこのごろ聊か思ふところがあつて戰死者の氏名を見ることを努めて避けてゐる。それ故會社でも正午版も夕刊も手にとりながらわざとそれに注意しなかつたのが、それでも、

「また大分たくさんやられてゐるな」

と同僚達の話し合つてゐるのを耳にしてゐたせゐか、やつぱり社の門を出ると日頃の習慣で電車へ乘り込む前に夕刊を一枚買ひ込んだのは殆ど無意識に近かつた。無意識と彼は思つてゐるが實はやはり、正午版でも夕刊でもわざと見なか

つたものをどうしても見たいといふのでこの一枚を買ひ入れたのかも知れない。さうして現に殉國忠魂を出して見てゐると氣づいて彼は急にふきげんになつてそれをポケットへねぢ込んだものらしい。この男はあの事以來神經衰弱にかゝつてゐる。

この男は牛嶋狂二郎といふ特色のある名前をつけられて自分では狂二郎の狂を鏡に代へたりたゞ二郎とだけ名乘つたりしてゐるが、一族間では律儀者とだけで通用し同僚間でも入社半年後に模範小市民と呼び慣はされるに至つた人物であつた。人々は幾分のユーモアと冷嘲の氣味でこんな風にあだ名したが、事實は、彼はごく小心に親切善良な市民であつた。支那事變に當つては最初から極く嚴肅に國民の模範として恥ぢない程憂慮してゐた。彼の憂ひは專ら天下國家にあつた。同年輩の男子が出動を命ぜられるのを見ると數年前に兵の任に堪へないものと認定された自分の情ない體質を恥ぢた。それ故、彼に代つて出動する人々に對する感謝の念は大きかつた。滿洲の守備兵になつて彼の地にゐる夫の身の上を案じてゐる妹に對しては、國家の觀念を注ぎ込んだり事變の眞相を説明したりする勞を惜しまぬだけで妹の家を中心にした心配には寧ろ冷淡であつた。女どもは常に家のために生きてゐるが、男子は國家と社會とに生きなければならないといふのが彼の信念であつた。この立派な男子が近頃の神經衰弱にはちよつとした挿話がある。それの前半は所謂銃後美談であらう、事實さう傳へた新聞紙もあつた、が後半の部分はさて何と名づくべきものであらうか作者も知らない。たゞいかにも律儀者らしい出來事と思つてこれを傳へるのである。

事の起りはまだ事變の早いころであつた。ある朝、出社の途中、新宿驛の待合室で彼はひとりの男の子を見かけたのであつた。

五つばかりの男の子がひとり室の中央の大きな卓の上でおもちやの戰車を動かして遊んでゐた。それが卓の上からころがり落ちて彼の足もとへ來たのを彼はにこやかに拾つて渡した。これが機會になつて見も知らない女が彼のそばに近づいて話しかけた。

この女は彼よりは五つ六つ年上の三十二、三でもあらうか。彼女は先づ自分を彼に紹介して、

「わたしは甲府在の田舍の者でございます。この子の母で、突然で失禮ですが、まるで途方に暮れて居りますのでお尋ね申しますが」

言ひながら彼女は帶の間から錢入れを取出して、なかゝら折り疊んだ紙片を取り出してひろげながら、

「こんなところはこゝから大分遠いでせうか」

と問ひかけたのであつた、紙片には鉛筆の走り書で京橋區某町の番地が記されてあつた。

「さうですね、之は東京のまん中でこゝからは遠いところですが」

「それは困りました。何しろ子供づれで知らない土地へ來て、急いで人を尋ねなければならないので……」

と話し出したのを聞くと、尋ね人といふのは「これのおやぢ」

と子供を指すからつまりは彼女の夫である。それが兵隊に行つた事があつて上等兵であるが「今度お上からお召しがあつて一刻も早く知らせなければならないのに家を出て東京へ出稼ぎに來てゐる。子供を相手に東京へ出て以前お世話になつてゐたお邸を尋ねてやつと尋ねあてゝ行つて見ると、もう一月も前にお暇をとつてしまつて、今は、この場所にゐるはずであると今度の所書を貰つたのはよいが、またまごまごと尋ねてゐるうちには時が經つてしまつて、今までにもう相當時間が經つてしまつてゐるのに、急場の間に合はなくてお上のお役に立たなかつたら何としようと氣を揉むばかり」であるといふのがこの女の訴へるところであつた。

「よろしい。僕が捜して上げます僕が今から行かうと思つてゐるところはその近くですから僕についていらつしやい」

「ありがとうございます」

と鄭重な禮をを繰返すばかりで急に動き出さうともしないので、今度は牛嶋君が反つてぢれ出して、

「坊やおいで、お父さんのところを捜してあげるよ」

〔「京城日報」昭和十三年一月七日夕刊四面〕

二

と子供に言ふと、子供は急に元氣になつて

「おぢさん、本當。」

と動いてゐる戰車をつまみ上げるとそれを懷のなかへねぢ込んで彼の方へすり寄つて來た。それにつられて子供の母も、子供の手をとつたまゝ牛嶋の後を追うた。牛嶋はもう驛の出口に立つて圓タクを呼んでゐた。尻ごみする子供や女をもどかしがつて牛嶋は自分で扉をあけて無理に圓タクのなかへ彼等を追ひ込むとそのあとから、車に乗り込んだ。一ぱいに巻かれたばかりであつたらしいおもちやのタンクは車上の子供の懷のなかでまだゼンマイの解ける音を立ててゐた。

「京橋の××町へ行つて、安全タクシイでしたね」

「はいさうでした」

「安全タクシイといふのを見つけてくれ給へ」

牛嶋は運轉手に行く先を命じてから腕時計をながめるのであつた。出社の時間に遲れなければいゝがと案じたからである。

「まことに御親切さまに」「とんだお世話さまに」など田舎の女は思ひ出す限りの言葉を列べて感謝の意を傳へようとしてゐた。牛島は自分の行く先きの近所だから序に車に乗せて行くだけだからお禮には及ばないと、何度も同じことを繰り返してゐた。

安全はすぐ見つかつた。牛島の出社時刻にはまだ十五分位はゆとりがあつた。牛島は眞先きに下りて安全の店に飛び込むと、いきなり、

「こゝに藤田といふ甲府の方の人が勤めて居ますか」

「藤田君、居りますが……」

「今店にゐますか」

「今は宿に歸つてゐますよ。藤田君は通勤でしてね。昨晩は夜稼ぐ番だつたものですから、今朝になつて歸りました。きつ

と寢てゐるでせう」
「宿はどこだ」
「すぐ近くに二階借をしてゐますよ」
「そこを敎へてくれないか、召集が來たといふので田舍から女房と子供とが迎へに來てゐるのだ」
「へえ、召集ですか。今度は運轉手が大ぜい呼ばれますからね」
　車上の女と子供とは、牛島が何を話し込んでゐるのか、何故父や夫が飛び出して來ないかと氣をもんで車から出て來た。牛島は彼等に事情を説明して置いて、待たせて置いた車に金を拂つてゐる。出社時間は迫つてゐる。電車で行くとすれば乗換へやなどで十分かそこらはかゝるであらう。しまつた今の車はやつぱりも少し待たして置いて、藤田の宿をさがさせて自分の社へもあれで出ればよかつたなに、非常の場合だ。社へも二十分や三十分は遲れて行つても仕方がない。序の事に藤田といふ人の宿までさがして女房や子供を安心させてやらう。こゝでぶつ放してしまつたのでは佛造つて何とやらである。
　藤田の女房と子供とは見も知らない人が遠くの停車場から彼等をこゝまでつれて來てくれた親切を安全の主人に對して説明して感謝してゐる。〔「京城日報」昭和十三年一月九日夕刊四面〕

三

「さあ、坊や。それぢやもう一度お父さんのところをさがさうや。もうすぐそこだといふから」
呼びかけられて子供は着物の上から懷のおもちやを抱きながら、牛島の方へ行く。その後を母親がついて行く。安全のおやぢは店さきに出て。
「旦那、ようがすよ、藤田君のところへはわたしが知らせに行つて來ますよ。いや、何に車を出しまさ。皆さんわたしの車に乗つて下さい。すぐそこと申しましても二丁や三丁はありまさあ」
　安全の主人はもう車に入つて店内から表へ出さうとしてゐる。牛島の親切がこの主人にも感染したのである。
　藤田運轉手は女房や子供と對面して女房や子供から親切な見も知らぬ人の話を聞いて、非常に感謝したのは申すまでもない。會つてみてその人のサラリイマンらしい風采を見ると、さすがは東京なれた運轉手だけにこれは頼もしい事務家と見てとつて、何れは既〔正しくは、卽〕座に賣り拂はなければならない古自動車の取引をこの仁に頼んだら店の同僚に一任するよりは安心であらうと考へた。彼は辭退する牛島に頼み入つて名刺を求めるのであつた。
「御迷惑でもございませうが、あなたさんを見込んでお願ひ申し度い事もございますから、お名前を是非伺はせていたゞきたいと存じます」
「名前を申し上げる程の者ではありませんから」
　と牛島は反つて當惑するのに先方は再三切望するから別にかくすにも當らないと氣恥しいながらに名刺を交換した。上等兵の運轉手は藤田寅之助といふ名前であつた

牛島の親切を知つて感心した安全タクシイの主人はこれを近所の人々などに話し傳へてゐるうちに時節柄の好話題と思つたものか、市内版の社會面の一隅に美談として活字になつて現れた、模範社員の珍らしい遲刻事件が怪しまれてゐると、その原因がこの美談によつて明かになつた。律氣者の模範社員を平素から笑ひ話の糧にしてゐるやうな惡い連中がさま〳〵なことを言つて揶揄するのであつた「藤田上等兵の女房は美人であつたに違ひない」

といふのは自分の心を以て他を推測する連中であつた。しかし牛島はさう言はれてみるとこの田舍女房は敵して美人といふのではないまでも好感を持てる婦人であつたとは感じた。

藤田上等兵は無事に入隊した。そのうちにどこかへ出動の命令があるものと樂しみにしてゐますがその際はあなたの御親切さまに對してだけでも一倍の働きを致したいと心掛けて居ります」といふ禮狀が牛島君のところに來た。上等兵の妻女のチエからは子供の代筆で鄭重な禮狀と一緒に、田舍人の律氣から子供とゝもに山で拾つたといふ栗の贈り物が到來した。牛島はその到着した禮のハガキを名前のわかつてゐるチエ女に宛てることが何やらうしろめたいので、忘れてしまつてゐた上等兵の名前を思ひ出すために名刺をわざ〳〵さがし出して寅之助様お内と託す心づかひを忘れなかつた。さうしてこのハガキには坊やの名前を敎へてほしいと書いてやつた。寅之助お内のチエ女と文通する代わりにあの子供に宛て時折のたよりをしてやりたいと考へたからであつた。牛島は或る朝ふと戰死者の名のなかで藤田寅之助を見出したらと虞れた。夫は彼の安否を憂へる爲であつたらうか。夫ならば寧ろ■の夫の方をもつと心配してやるのが自然ではないかと牛島は自分に反問して見た。さうして藤田が萬一戰死するやうな事があつたなら、と空想して牛島は自分がそれを心の底で希望してゐるのではないかと思ひはじめた。飛んでもない。そんな場合には彼の妻女と子供とに慰安の言葉を忘れてはならないと思つてゐるだけだと自分で辯明して見るが、それでもまだ藤田上等兵に對する異常な關心が不安でならない。藤田上等兵の妻子チエを運命が寡婦にしてしまふやうなことがあつたらといふ危惧が何か底の知れない私心から出てゐるのではないかといふ疑ひが自分から消えないのであつた。まだ獨身の牛島は自分が藤田上等兵の細君に對して自覺しない戀情を催してゐるのではないかと思へてならない。そんな事でもし藤田上等兵の戰死を期待してゐるやうな事があつたなら人を呪つてゐるも同然である。こんな事があつてはならないと自ら責め戒めて、程近い八幡さまの社へ藤田上等兵の武運長久を祈りに參詣したこともあつた牛島が新聞紙を手にして戰死者の名前を見ることを忌み恐れるのにはこんな心持がひそんでゐたのである。あんな田舍女房のそれも年上の者をと自分で打ち消して見るが、牛島が彼女のために盡した行爲を考へて見て、彼女が見るから感じの惡い女であつたら果してあれほどの好意をもつて勤務時間にまでおくれるやうな結果にはならなかつたらうと考へつゞけて見ると、牛島はやはり藤田上等兵の生存を呪ふやう

なことは決してしてゐないまでも、その妻女に對して特別な心づかひを抱いてゐる事は自ら否定することは出來なかつた。彼女の容貌は決して人の注意をひくものではなかつた。しかしその當惑げな愁ひと夫を探し出してお國のお役に立たせなければならないと思ひ込んで張り切つた精神の狀態とが確に彼女の表情のなかにかがやき出してゐたのを牛嶋は忘れ得ないらしかつた（終）〔「京城日報」昭和十三年一月十一日夕刊四面〕

【付録】

文壇の耆宿谷崎氏夫人と佐藤春夫氏との結婚

「友愛結婚」の實行？

春夫氏多年の思ひを遂ぐ

リンゼイの友愛結婚が素晴らしい勢ひで日本の若き讀書層に大なる波紋を捲き起しあちらこちらで友愛結婚の是非が批判されてゐる時、自然主義の耆宿として明治、大正、昭和の三代にわたつて世の文壇から超然と放れ星群を支配する巨大なるオロラの如き存在を示してゐた谷崎潤一郎氏とこれまた谷崎と歩を共にしていはゆる文壇から遠く慧星の如き出現に獨自最高の美を歌つてゐた詩人佐藤春夫氏との間に自由戀愛、自由結婚、自由離婚の完全なる實行がなされた

【大阪電報】文壇の巨匠谷崎潤一郎（四五）及同夫人チヨ子（一五）〔正しくは、三五〕佐藤春夫（三九）の三氏は十八日突如連名を以て谷崎チヨ子夫人は佐藤春夫氏と結婚し谷崎氏の長女アユ子さん（一五）はチヨ子夫人に連れられて佐藤家の人となるべき旨の聲明書を親しき友人知己に送り、文壇は勿論各方面に異常なセンセイションを捲き起してゐる、谷崎氏夫人チヨ子さんと佐藤春夫氏とは久しい以前から戀愛葛藤があり、谷崎氏もこれについて苦しみ續けて來たが去る六月末佐藤氏が阪急沿線岡本に谷崎氏を訪ね、意中を明かしたことから話が進み、谷崎氏は佐藤氏の兩親とも相談の上谷崎氏はチヨ子夫人を離別し、夫人は更めて佐藤氏と結婚し、アユ子さんも母と共に佐藤氏の許に行くことゝなつたものである、なほ佐藤新夫妻は近く東京の自宅を片付て岡本の谷崎氏宅に移り、谷崎氏は旅に出ることゝなつた、岡本の自宅で谷崎氏は語る

チヨは十六年間連れ添つた妻です、女としては缺點はないが僕がこんな性格だから性格的には合はぬ處もありました、六、七年前にゴシツプの口の端に上つたこともあつたが、その後生活の場所も變つたりして、チヨの氣持もそのことを忘れてゐた樣だが、今度は佐藤の方から話があつたのです、佐藤の氣心も判つてゐるし、チヨの氣持ちも聽いた上佐藤には子供もないしアユ子もつけてやることにしました、僕は當分旅に出ますが佐藤との交際は勿論從前通りです

なほ佐藤氏はチヨ子夫人に對する思慕の情を斷ち切れず、最近一萬圓の手切れ金を出して前夫人タミ子さん（一九）と別れ、解決し切れぬ惱みを谷崎氏に訴へたもので、チヨ子夫人は以前、前橋で初子といつて鳴らした名妓であつた、なほ十八日

知友に送つた聲明書は次の如し

拜啓炎暑の候尊堂益々御清榮奉慶賀候陳者我等三人此度合議を以てチヨ子は潤一郎と離別致し春夫と結婚致す事と相成潤一郎娘鮎子は母と同居致すべくもとより双方交際の儀は從前の通りにつき御諒解の上一層御厚誼を賜度何れ相當仲人を立て御披露に及ぶべく候へ共不敢取以寸楮御通知申上候

〔「京城日報」昭和五年八月二十日夕刊二面〕

文學的身の上話

秋刀魚の詩で、また、〝田園の憂鬱〟その他の小説であまりに有名な佐藤春夫氏が文藝春秋社から北支に派遣されて途次、愛甥の佐藤龍兒氏及び雑誌「新日本」社からやはり特派の新鋭日本主義評論家保田與重郎氏と同行で入城した、城大國文學會でこの春夫氏を迎へて七日午後四時から同學法文學部第一會議室に於て高木市之助教授の紹介の下に約一時間に亘り春夫氏の茶飯事な〝文學的身の上話〟といふ興味深い講演があつた、以下は同講演の要領筆記である

【上】

初めて原稿料を貰ふまで

創作の體驗か、身の上話しでもといふことですが一應宣傳がましい氣もします、けれど自分の身の上話なら自分丈けが知つてゐることですし、まあお茶話のつもりで文學的な身の上話をかい摘んでお話しませう、といつても別にとり立てた學問もないし勉强もしませんでしたから結局何も彼もぶちまけた身近かのことばかりです、私は父方に文學的な血統があつたさうで子供の頃六歳の時に父のやつてゐた俳句の席に出て十七文字の言葉を饒舌つたとのことです、それから中學の二年生になつたころ次第に文學に興味を持ち出し急に學校の成績が悪くなり三年のときには遂に落第しました、そのために父が怒つて、文學書をみな庭に叩きつけられたことを覺えてゐます、この時父は母親が私を甘やかして文學書なんかを讀ますからだと責め、母は父が畫家や俳人といつた人達を始終家に寄せつけてばかりゐるからだといつて爭ひが絶えませんでした、が結局内氣な母の性質は過激な父の性質に打ちひしがれて胸を痛めてゐるのをみると子供心にもどうしても自分の志をなし遂げねば母のためにも申譯ないといふやうな決心を固めました然し父も私が文學をやることに必ずしも不贊成ではなくて、常に立派な創作をするためには立派な學問をして自分の知識を磨かねば大成はしないと口癖に■してゐました、今になつてみるとまことに父の申した通り私の文學は小成といふか何もこれといつた作品をものし得ずにはや頭の髪も、耳の毛も白くなつて轉た落莫たる感に打たれるのであります、けれど年齡の話しになりましたが私は早熟で早くより拙い詩を作つたり、當時紀州に來られた與謝野鐵幹先生を父がお招きしたりして先生の知遇を得ましたので、弱年にして幼稚な作品が活字になり、知らない人は私を隨分老人に思つてゐる人が多く實際に會つ

てみると「とても若いんですネ」といはれます（註　明治二十五年四月九日、和歌山縣新宮町で生れ、中學は新宮中學なり）この頃では所謂文學青年が文壇に出るのが年齢的に遅くなりましたが、谷崎潤一郎や久保田萬太郎は二十四、五で世の中に出たのです、恥しい話ですが文學といふものは如何なるものかといふやうな考へもなく文學で身を立てようとだけ考へてゐました、自分の書いたものを生田長江先生にみて貰ふと「きみは文章は拙いが頭の方が文章よりはよさそうだ、きみのものは情景のが多すぎる、もつと思つたことをそのまゝ表現したらどうだ、叙述が重複してくどくしい、然し大杉榮が丁度さうだつた、然し彼はその生活と共に文章も成長した、思想が圓熟すると文章も物になるものだ」と指摘されたのを今日になつて思ひ當ります

中學を卒へると永井荷風に憧れて荷風が教鞭をとつてゐた慶應義塾に入學しましたが、間もなく、荷風が去つたので退學して小説を讀んだり生田春月等と圖書館に行つて議論などばかりして一向に勉強もせずごろくしてゐました、それでも自惚れだけは強くて「俺は一擧にして世人を驚倒させるやうなものを書く、くだらないものは書かない」と高言してゐました。然しやはり何や彼やと書きましてその書いた原稿紙を大きい柳行李一杯につめて友人の下宿に預けておいた所がその友人が下宿料を倒し夜逃げした々めに遂々その行李はとれず仕舞ひでした、原稿はともかくその中に惜しい寫眞が二、三枚あつたのが今も心殘りです、二十五歳になつて父親から「もうこれから先は自分で獨立して生計を立てろ」といはれ實際上の生活の負擔が生したわけで、長江先生その他の心配で「何か出來たものがあれば」と親切にいはれました思ひ出しても感謝に堪へないのは長江先生が私の七、八枚のものをわざくく讀賣新聞社に持つて行かれ、三圓七、八十錢の稿料を貰つて來て勵まして下さつたことです

學藝だより

△佐藤春夫、龍兒、保田與重郎の三氏は八日午後十一時發の列車で退城、平壤に向つた

〔「京城日報」昭和十三年五月十日夕刊四面〕

【下】

若い頃に描いた野心と空想

　そのうちに東京の生活にも飽きました、東京よりも生活の樂なところに住んだ方がよからう、とこれも文學に熱中して生涯を通つた友人の言葉で盆と暮に諸支拂ひをすればよいといふやうな暢氣な田舎といふので横濱から八王子に行く途中の都筑郡の百姓村の（註、中里村）に移りました、これが丁度春の終りで自然が人間に一番樂しい季節で唯無反省に面白からうと輕率に農村生活に入つたのです

　これは意識して省いたのですが實はその頃同棲してゐた女がありました、私はその女と古本屋でも買つて呉れさうもない書物と犬や猫と一緒に引越したのです（註、大正五年E・Y

女及び愛犬二頭、愛猫二匹）

話は前後しますが、私にはまるでもう一人別の私がゐるやうな傳説があるのです、その傳説の私佐藤春夫が本郷通りをニーチエ全集全部を抱へながら散歩する。嫌な奴だ、といふ評判がたつたことがあります。實は私はそのニーチエ全集を古本屋に賣りに行つたのでした。かうして引越賃を拵へてまで移つた田舍でしたが、四月の末に行つて十月の末には嫌になり十一月に辛つと支拂ひをして東京に引揚げました。この頃未だ私は時々實家から送金を仰いでゐましたこれは措ておいてこの田舍の生活を人に話すと面白いから書けと勸められ、自分も田舍でのノートをとつてあつたのでその斷片的な記錄を組合せて意識的に構成して虛實相半ばした――いや事實八分に後に二分が誇張の小説が伴ひ世間で認められました。之が〝田園の憂鬱〟です（註、大正六年五月に雜誌「黒潮」に約四十枚が發表されたので春夫廿六歲のときである）

當時は翻譯文學が盛んに行はれた時代でして私もテキストの外に隨分翻譯物を讀み漁りました。それから私は詩歌を作つてゐたゝめに歌に關する日本の古い書物を盛んに讀みました。その他には高等學校の受驗準備などでかなり日本の色んな書物に目を通しましたがその頃の私の淺薄な考へでは西洋の文章と較べると日本の文章といふものは立體的でなくコクのないものだと思ひました。そこで例へば今單に〝私〟といふのでも西洋の如く關係代名詞を用ひて〝此慌しい旅行者である私〟といふやうな方法で自分の文章にもニユーアンスを出さうと試みたのです。一つは私が油繪を描きますので自然の事物を描くにも幾つかの色彩を積み重ねて描くといふやうな考へも手傳つてゐたのでせう

ついでに自然描寫に就いてゞすが、私は自然といふものはそれのあるがまゝの非情な姿でなく自分の心を通して觀た自然であるからこれを表現したいと考へてゐました、題名は忘れましたがポーの短編です。愛人と幸福な生活を暮してゐた時は自然が百花亂の如く美しく見えたが、愛人を喪つてから自然は忽ちその生彩を失くして醜く見えたといふのがあります。私はそのやうに觀察者の心まで表現されるやうな描寫を西洋流の文■で傳へようといふ分不相應な希望を持つてゐました、この企てが成功したか否かは自分でも解らないが唯自分では不滿足な出來榮であつたと思つてゐます。然しこれを面白いといふ人があつて私の文學が世の中に出たのです。

そんなわけで私は日本の文章は立體性がないところに美しさのあることには氣がつかなかつたのです。從つてこの青年らしい未熟な■■な作品――それが結局私の特徵ですが――が當時の青年に愛讀されたものでせう。けれどほんの單純なものでありますが、僅五ヶ月の田舍生活でも今お話したやうな考へを以て自然を觀察したかつたらあの作品は出來なかつたらうと思ひます。さう考へると東京でブルヂヨア學校に籍をおいてゐた時代（註、明治四十三年四月上京、慶應義塾文學部に入學し大正三年途中退學）その頃出來たばかりのカフエー、それは文字通り珈琲店でしたが、そんなところで珈琲を

喫んで氣焔を上げてゐて後で履歴書を書く度に困つたやうに進級も卒業もしなかつた。そんな間に寧ろ紀州の田舍にでも歸つて炭焼きでもしてゐたら、よしそんな生活が一週間も續かなかつたにしろ、私にとつてもつと立派な體驗になつたらうとさへ考へます

もう今は亡い長江先生が「どうせ人間の生涯は後悔しか殘らないのだ、やり過ぎた後悔か、やり足らなかつた後悔かの孰れかだとすればやり過ぎた後悔の方が意味がある、俺はやり足らなかつたがきみはうんとやり過ぎろ」と大いに激勵して下さつた。お蔭で私は振り返つてみれば成る程少しやりすぎた憾みもありますが、またやり足らなかつた悔いもあります。學問の如きは後者です。長江先生は一方でやり過ぎればまたどこかでやり足らないものが出來ることに■■がつかれなかつたでせう〔「京城日報」昭和十三年五月十二日夕刊四面〕